

婦人と子とも



嗚呼我が幼児の友

天が、我が可憐なる幼児の友として、フロエベル先生を與へられたのは、實に今より百二十二年前、即千七百八十二年の今月二十一日である。幼児保育の任にある者、兒童教育の任にある者、皆、此日を紀念して、此偉人の出現を祝せなければならぬ。我が會も亦、毎年總會を開きて此日を祝することゝなつて居る。

今日の教育界に於て吾等が要する所の人は如何なる人物だらうか、筆舌の間に忽ちにして教育の術を説き、忽ちにして教育の學を論じる底の人には、世は既に飽和點に達して居るのである。書物を著は

して金を儲けよう、言を弄して名譽を博しよう、奇巧を奏して一躍地位を得ようと云ふ類の教育者は實に天下に充滿して居るのである。今日は實に “Kommt, laßt uns unsern Kindern leben” を口にして、所謂名譽や地位や利益やを一切捨て、顧みず、蓬髮弊衣、一生を通じて眞に幼兒の友として終りたるフロエベル先生其人の如き人を要することが、最も急なのである。

先生の傳記は、茲に詳述する事は出来なないが、左に Reminiscences of Froebel と云ふ彼の、ピエロー夫人の著書の一節を引かう。

余がフロエベルとの初對面

千八百四十九年五月の未つ方、余はチューリングアのリーペンスタインの温泉場に着し、前年來馴染となれる旅舎に投宿しぬ。此家の主婦は、先づ一通りの挨拶の後、何か其後變りたる事もなきやとの余の尋ねにつけて、答へける様「左ればにて侍り、先程來年老ひたる一人の男の、温泉に近き野邊に住居せるが候うて村のうなるらを集めては、日々、遊び蹈りに餘念も侍らず、さればにや、誰申すもなく馬鹿老爺馬鹿老爺と稱へ侍り」

この對話の後數日、吾は近き邊りにて、かく呼ばれたる馬鹿老爺に出遭ひぬ、打見たる處、丈高き瘦せ形の彼れ是れ半白の頭の男にて、其日も三つより八つ位までの村のうなるもの、大方洗足にて衣服も怪しげなる一隊を引き連れて、とある小山に上り、其處に彼等を整列させ歌を歌ひつゝ遊

戯をなしぬ。其時に於ける彼の男の愛に充ちたる忍耐振りと手際と、一言にいへば、うなるらが彼の指揮の下に、さまざまの技を演じつゝある間に於ける彼の全き態度には、何人かは感動せざるべし、果せるかな、我友の眼には既に涙の露を宿せり、吾が眼にも亦。吾は我が友に向つて語りぬ。

「世人より馬鹿老爺と呼ぶるは、げに此人よ、さりながら、かゝる人こそ、當代の人よりは賤しめられ、石にて打たれながら後代の人に由りて記念碑を建てらるゝ一人ならめ。」

やがて遊戯も終りければ、吾は彼の人に近づきて言葉をかけぬ
「見うけ参らするに、御身は人々の教育に一身を委ね給うにこそ」

「然り」と言ひつゝ、親切なる友情に充ちたる眼を余に注ぎて

「余は其人なり」と答へぬ。吾は更に言葉をつぎて

「夫こそ今の時に最も必要なれ、人は現在の状態を改良せらるゝにわらずば、近き將來の世に實行せられんことを期したる吾等の總べての美しき理想は、到底實現せらるゝこと難からん」といへば

「御尤もの事、さりながら現在の人を改良するは吾等が教育するにわらずば期し難し。夫故吾等はかくしてうなるらと共にわらざるべからず」と、彼は答へぬ、吾は更に續けぬ。

「然し君よ、かゝる正しき教育は何處より得らるべきか、吾等が日頃教育と呼ぶ所のものを見るに

大方は迷誤と罪惡とのみ、そは可憐なる人間の天性を、一時の偏見、不自然の規則に由りて壓迫し
 出べき丈け多くを注入して爲めに人間一切の原質を亡はしむるに外ならず」

「成る程、余は窺かに信ず、余は此迷誤を防ぎ、自由の發達を得しむべき何ものかを得たることを
 さらば暫らく、」と、吾が尙志の姓名を詳にさざる彼人は語りぬ。さらば、暫らく、余と共に
 來りて、余が建物を見舞ひ給はずや、其處にて尙深き御諭も拜聽せん程に」

かくて支度を整へて共に歩を移しつゝ、野畑の間を過ぎりて、廣き庭の眞中に立てる田舎家に至り
 ぬ。こは彼が幼稚園保姆を養成せんが爲めの建物なりけり、かくて、彼人は、二三の學生に吾を紹
 介したる後、大なる一室を開きて、そこに納めあるさま々の遊戯道具を吾に示しつゝ、説明を始め
 たれど、折節吾はそを十分理解し得ざりき。

此時まで、吾は彼の男の如何なる人なるかを知らざりしが、會々一人の學生の「フロエベル先生」
 と呼びしより、吾は、始めて思ひ起しぬ。嘗て遊戯を以て幼兒を教育せんと望みし人の名のフロエ
 ベルと聞きしことを、(下略)

(東 牧羊)